冬の海

海月 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冬の海

【Ｎコード】
Ｎ３８６０Ａ

【作者名】
海月　涼

【あらすじ】
美紀は突然の別れを告げられる。しかし、それは夢だったのか、現実だったのか…？

簡単に言えば…フラれた。

ただ、それだけのことなのだ。

でも、私は彼を未だ愛していて、涙がとめどなく流れる。

でも、ただ『それだけのこと』なのだ。

＊＊＊＊＊

昨日の夜。彼からの電話。一週間ぶりの会話、愛しい声。それは何故か乾いていて、今考えれば『空々しい』とはああいうことなのだろうか、とか。

その時の話題は彼の飼っている猫のことや新しく発売されたお菓子のこと、彼の上司の愚痴に転職の相談。トータルで３時間２６分の電話。

思い出せることはたくさんあるのに、何故だろう…

別れ話だけが思い出せない。その一部分だけ、まるで夢だったかのように…

そうか、夢だったのか。

そういえば最近寝てなかったし、今日気付いた時にはベッドの上だった。

そうか。夢、だったのか…

内心ホッとした。表情も和らぐくらいの感情の変化。

彼と付き合ってからもう5年断つけど、こんなにも彼のことを大切に考えた時期なんであったかしら？

なんとなくで付き合い始めて、なんとなくで共に上京し、なんとなく愛を確かめあった。

さほど恋愛に興味がなかった私の中に、彼はいつからこんなに侵食していたのだろう…

いなくなったと思った矢先、取り戻したとわかった瞬間こんなにも彼を愛おしく感じる私は、現金な奴だろうか？単純で自己中な奴だろうか…？そんなこと、最早どうでもよかった。

今すぐ彼の声が聞きたい。

今すぐに…

そう思った時、玄関から彼の声が聞こえた。

「美紀？」

あぁ、今彼とシンクロしていたんだわ。彼もきっと不安な夢を見て、私に会いに来た。きっとそうなんだわ。

「いるんだろ？」

うん、やっぱりそうに違いない。

私は急に元気を取り戻し、涙を拭いて玄関に急いだ。

小さなワンルームのアパート。ベッドからほんの数歩で玄関に着くはずなのに、今の私にはその距離さえもどかしかった。

「あ、出てこなくていい。」

不意に彼の声が聞こえた。私の手はもうドアノブの上。

「そのまま、そのままでいて」

落ち着いた彼の声。いつもより低めな声。

私はドアノブに置いてある手をそっと引っ込め、覗き穴から外を見た。

落ち着きがなく、ポケットに手をいれたままその場で足を動かしている彼。「あのさ、今日はこれ、返しに来ただけだから…」

そういいながら彼は右手をポケットから出し、郵便受けに何かを入れた。

カシャン

金属と金属がぶつかり合う冷たい音。

「じゃあ」

一度も目が合わないまま、彼はその場を去っていってしまった。

彼の足音が遠ざかる。少しクセのある足音が聞こえなくなる。

私はドアに耳を張り付け、しばらく足音を聞いていた。

耳に伝わるひんやりとしたドアの感覚。私は思い出したように郵便受けを開けた。

そこには、小さな鍵が落ちていた。

期待に胸膨らませて上京したあの日、彼の部屋の合鍵と交換した鍵。
二人で同じマスコットキーホルダーをつけて
「何かくすぐったいね」
と笑いあった鍵。

マスコットは色あせていて、それでも消えかかった口は笑っていた。

そのマスコットが告げたのは、未来を期待するあの日の幸せではなく、別れ。

石造りの玄関に座り込み鍵を手にとった。

でこぼこした部分をなぞりながら、涙がまた頬を流れるのを感じた。

あぁ、夢じゃなかったんだ。昨日のあの電話は確かにあって、私達は離れ離れになってしまったのだ。

鍵のでこぼこはまるで私達のようだった。
決して心が等しく通い合うことがなかった私達。彼の気持ちが大きかった時、私はそれに気付かず、彼の気持ちが冷めたときもまた、同じように気付かなかった。そして自身の気持ちにさえも。

「ッ…」

鍵をなぞっていた指が切れた。恐らく、粗い加工の金属の破片が引っ掛かったのだろう。
小さな傷口から真っ赤な血が滲む。

それを見て、たいして痛くもないのに、突然滝のように涙が溢れて来た。

泣いた。

泣いた。

泣いた。

外が暗くなり、いつも残業で遅くなるお隣りの旦那さんが帰って来てもまだ、泣いた。

私は彼が大事だったのだ。彼を愛していたのだ。何も気付かず、安心して生きて来れたのは、すべて彼のおかげだったのだ。

今の私は見る影もなく、汚く、醜く、浅はかだった。

＊＊＊＊＊＊

波の音が響く。

私は一人、海に来ていた。冬の海には人はいなく、野良犬が餌を探してさ迷っているだけだった。

ここは、去年の夏に彼と来た海。波が荒く、泳ぐのには適さなかったが、ただ押しては引いていく波を見ているだけで楽しかった。

彼と二人、様々な未来を語り、冗談を言い、私の作った不格好なお弁当を頬張った。

あぁ、あの頃は暖かかったのに…今はこんなにも寒い

それは隣に彼がいないから？

自問自答も虚しく、私はブーツを脱ぎ、海に入っていった。

冷たさは、感じなかった。

だって心の方が冷たいから。

胸まで水が来た時、胸ポケットに入れていたマスコットつきの鍵が私から離れていった。

そう、こうしてみんなみんな私から離れていくのね

マスコットは未だ微笑みながら、ゆらゆらと漂いながら沖に流れていく。

携帯電話もなにもかも、もう使えなくなるほど濡れている。遂に水は口まで上がって来た。

海の水は塩辛かった。まるで、愚かな私の涙のよう。

私は彼を愛していた。

私は彼を愛している。

今も、これからもずっと。

今も、泡になってもずっと。

突如、彼の別れの言葉が甦った。

「俺の恋愛に突き合わせて…ごめん」

全ては勘違いだった。彼女も彼も。

しかし、それに気付く頃にはもう彼女はこの世にはいなかった。

後日見つかった彼女の水死体は、警察が2人かがりでやっと開ける程の強さであの鍵がしっかりと握られていたという。

（後書き）

お読み下さり、ありがとうございました。まだまだ稚拙な部分もございますが、この処女作品を踏み台として、物書きとして成長していけるように頑張りますので、何卒ご容赦下さいませ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3860a/

冬の海

2011年1月16日00時38分発行